

風化から風土へ

犠牲の上に成り立つ今、課せられた未来へのテーマ。

消えゆくモノとつなぎゆく想い

モノではなく心で

「真実の(心の遺産)」を次代へ

大地を揺るがせた爆音とともに中空で渦を巻いたキノコ雲。黒煙を含む雲から舞い落ちてきた黒い粉雪……。大非常の状況を知ったとき、広島や長崎の原爆を連想せずにはいられません。人口約4千人の方城村で、その5分の1にあたる命が突如として失われた方城大非常は、小さな村にとって、原爆にも匹敵する惨事でした。

「当時の目撃者がすでにいない」「戦時中の炭鉱は撮影不許可なため写真入手は困難」「織井青吾氏の著書も絶版」という状況だった今回の特集。日本最大の炭鉱爆発が起きたこの町の中でさえ「方城大非常」という大事故の感覚は薄れていました。語り継ぐものがないければ炭鉱も、そしていずれは、戦争をも風化してしまうような危機感さえ覚えたのでした。

いまの子どもたちが、突如ここに炭鉱の煙が上がっていたことを日常で感じることは、ほとんどありません。かつて天高くそびえたボタ山の存在も、ボタ山の言葉の意味さえもわからないのです。ママの時代にはぐくまれた人の心の奥深くにあるボタ山も、過ぎゆく時とともに忘れ去られようとしています。

煙突も竪坑も倒され、炭鉱長屋が姿を消し、そして昨年は、三菱方城炭鉱の本事務所跡も解体されました。ママの風景はすっかり変わり果て、かろうじて昔の面影をしのげるのは、三菱方城炭鉱の坑務工作室(赤煉瓦記念館)と、沈黙した赤レンガ塀だけになってしまいました。

「坑夫の血を吸って赤くなった」との逸話が残る、この異様に高い赤レンガ塀を目にするとき、炭鉱が他の介入を許さない場所であったことが感じ取れます。しかし、この赤レンガ塀も老朽化して傾き、崩落の危険性があるため、道路や区画整備の関係から、まもなく壊される運命にあります。

この町に日本経済発展の礎を築いた炭鉱があったことも、日本史上最大の犠牲者を生んだ炭鉱爆発事故が起きたことも、かつて閉山で封じられた坑口のように埋もれようとしています。

ママの面影が次々と姿を消していく。わたしたちが口から口へ、親から子へと語り継いでいくしかありません。風化していく過去は、この町の風土として、心から心へ次代につなぐしかないのです。炭

国登録文化財の赤煉瓦記念館。将来、町のママの面影は唯一、ここだけになるかもしれない。



大きな犠牲を経て成り立っている現在、そこに生きるわたしたちは「真実の心の遺産を残す」という未来へのテーマを担っているのですから。



12月15日午前9時40分、方城大非常のあった日時に町内放送で呼びかけます。町全体の哀悼の意に、ぜひ、みなさんの気持ちを添えてください。

黙とうを

インタビュー

大非常について学んだ伊方小学校6年生

長尾 祐稀くん
(伊方 長浦)



方城大非常の犠牲者に自分と同じ年の人がいたことに驚きました。両親を失った人はどんな気持ちだったのか、自分だったらどうもえきれません。日本の発展を支えた炭鉱がこの町にあったことを誇りに思うし、悲しい過去も決して忘れてはならないと思いました。



【参考】方城大非常、その方城炭坑大爆発、流民の果て 福岡毎日新聞
方城町「炭鉱」愛読家社史 資料提供 織井青吾さん 田川市史
史博物館 直方市石炭記念館 西日本新聞 福岡市 池本正義さん
橋元光子さん 田島理さん 桑野正さん 前川俊行さん 森本弘行さん